〔B 年〕聖霊降臨節第５主日(2023 年 6 月 25 日)

【旧約聖書日課】エゼキエル書　34章1～6節

1主の言葉がわたしに臨んだ。2「人の子よ、イス
ラエルの牧者たちに対して預言し、牧者である彼
らに語りなさい。主なる神はこう言われる。災い
だ、自分自身を養うイスラエルの牧者たちは。牧
者は群れを養うべきではないか。3お前たちは乳を
飲み、羊毛を身にまとい、肥えた動物を屠るが、
群れを養おうとはしない。4お前たちは弱いものを
強めず、病めるものをいやさず、傷ついたものを
包んでやらなかった。また、追われたものを連れ
戻さず、失われたものを探し求めず、かえって力
ずくで、苛酷に群れを支配した。5彼らは飼う者が
いないので散らされ、あらゆる野の獣の餌食とな
り、ちりぢりになった。6わたしの群れは、すべて
の山、すべての高い丘の上で迷う。また、わたし
の群れは地の全面に散らされ、だれひとり、探す
者もなく、尋ね求める者もない。

【使徒書日課】使徒言行録　8章26～38節

26さて、主の天使はフィリポに、「ここをたって
南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け」
と言った。そこは寂しい道である。27フィリポはす
ぐ出かけて行った。折から、エチオピアの女王カ
ンダケの高官で、女王の全財産の管理をしていた
エチオピア人の宦官が、エルサレムに礼拝に来て、
28帰る途中であった。彼は、馬車に乗って預言者イ
ザヤの書を朗読していた。29すると、“霊”がフィリ
ポに、「追いかけて、あの馬車と一緒に行け」と
言った。30フィリポが走り寄ると、預言者イザヤの
書を朗読しているのが聞こえたので、「読んでい
ることがお分かりになりますか」と言った。31宦官
は、「手引きしてくれる人がなければ、どうして
分かりましょう」と言い、馬車に乗ってそばに座
るようにフィリポに頼んだ。32彼が朗読していた
聖書の個所はこれである。

「彼は、羊のように屠り場に引かれて行った。
毛を刈る者の前で黙している小羊のように、
口を開かない。
33 卑しめられて、その裁きも行われなかった。
だれが、その子孫について語れるだろう。
彼の命は地上から取り去られるからだ。」

34宦官はフィリポに言った。「どうぞ教えてください。預言者は、だれについてこう言っているのでしょうか。自分についてですか。だれかほかの人についてですか。」35そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの個所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた。36道を進んで行くうちに、彼らは水のある所に来た。宦官は言った。「ここに水があります。洗礼を受けるのに、何か妨げがあるでしょうか。」†<37*フィリポが、「真心から信じておられるなら、差し支えありません」と言うと、宦官は、「イエス・キリストは神の子であると信じます」と答えた。*> 38そして、車を止めさせた。フィリポと宦官は二人とも水の中に入って行き、フィリポは宦官に洗礼を授けた。

【福音書日課】ルカによる福音書　15章1～10節

1徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに
近寄って来た。2すると、ファリサイ派の人々や律
法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食
事まで一緒にしている」と不平を言いだした。3そ
こで、イエスは次のたとえを話された。4「あなた
がたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、そ
の一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残
して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らな
いだろうか。5そして、見つけたら、喜んでその羊
を担いで、6家に帰り、友達や近所の人々を呼び集
めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜ん
でください』と言うであろう。7言っておくが、こ
のように、悔い改める一人の罪人については、悔
い改める必要のない九十九人の正しい人について
よりも大きな喜びが天にある。」

8「あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女
がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火
をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さ
ないだろうか。9そして、見つけたら、友達や近所
の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけ
ましたから、一緒に喜んでください』と言うであ
ろう。10言っておくが、このように、一人の罪人が
悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」

「聖書協会共同訳」（2018年版）読み比べ

エゼキエル書34章1～6節

[1]主の言葉が私に臨んだ。[2]「人の子よ、イスラエルの牧者に預言せよ。預言して、彼ら、牧者に言いなさい。主なる神はこう言われる。災いあれ、わが身を養うイスラエルの牧者に。牧者は羊の群れを養うべきではないのか。[3]あなたがたは脂肪を食べ、羊毛を身にまとい、肥えた動物を屠るが、群れを養おうとはしない。[4]あなたがたは弱ったものを力づけず、病めるものを癒さず、傷ついたものを包まず、散らされたものを連れ戻さず、失われたものを捜し求めず、かえって力ずくで厳しく支配した。[5]彼らは牧者がいないので散らされ、あらゆる野の獣の餌食となり、ちりぢりになった。[6]私の群れは、すべての山々、すべての高い丘の上でさまよい、地の全面に散らされた。尋ね求める者も、捜し求める者もいない。

使徒言行録8章26～38節

[26]さて、主の天使はフィリポに、「ここをたって南に向かい、エルサレムからガザに下る道を行け」と言った。そこは寂しい道である。[27]フィリポは出かけて行った。折から、エチオピアの女王カンダケの高官で、女王の全財産の管理をしていたエチオピア人の宦官が、エルサレムに礼拝に来て、[28]帰る途中であった。彼は、馬車に乗って預言者イザヤの書を朗読していた。[29]すると、霊がフィリポに、「追いかけて、あの馬車に寄り添って行け」と言った。[30]フィリポが走り寄ると、預言者イザヤの書を朗読しているのが聞こえたので、「読んでいることがお分かりになりますか」と言った。[31]宦官は、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」と言い、馬車に乗って一緒に座るようにフィリポに頼んだ。[32]彼が朗読していた聖書の箇所はこれである。

「彼は、屠り場に引かれて行く羊のように
毛を刈る者の前で黙っている小羊のように
　　口を開かない。
[33]卑しめられて、その裁きも行われなかった。
誰が、その子孫について語れるだろう。
彼の命は地上から取り去られるからだ。」

[34]宦官はフィリポに言った。「どうぞ教えてください。預言者は、誰についてこう言っているのですか。自分についてですか。誰かほかの人についてですか。」[35]そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの箇所から説き起こして、イエスについて福音を告げ知らせた。[36]道を進んで行くうちに、水のある所に来たので、宦官は言った。「ここに水があります。洗礼を受けるのに、何か妨げがあるでしょうか。」†〔*[37]フィリポが、「真心から信じておられるなら、差し支えありません」と言うと、宦官は、「イエス・キリストは神の子であると信じます」と答えた。*〕[38]そして、車を止めさせた。フィリポと宦官は二人とも水の中に入って行き、フィリポは宦官に洗礼を授けた。

ルカによる福音書15章1～10節

[1]徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。[2]すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを受け入れ、一緒に食事をしている」と文句を言った。[3]そこで、イエスは次のたとえを話された。[4]「あなたがたのうちに、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を荒れ野に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し歩かないだろうか。[5]そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、[6]家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。[7]言っておくが、このように、一人の罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にある。」

[8]「あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、灯をつけ、家を掃き、見つけるまで念入りに捜さないだろうか。[9]そして、見つけたら、女友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。[10]言っておくが、このように、一人の罪人が悔い改めるなら、神の天使たちの間に喜びがある。」

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・6 月 25 日「聖霊降臨節第 5 主日」の日課主題は「個人に対する教会の働き」。
・旧約聖書日課は、「エゼキエル書」から、民の共同体の回復を告げる預言集のうち、牧者のたとえで語られる箇所の一部。使徒書日課は、「使徒言行録」から、エチオピアの宦官の洗礼の逸話箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、「見失った羊のたとえ」と「無くした銀貨のたとえ」の箇所。

旧約日課（エゼキエル 34 章より）

・「エゼキエル書」は、ユダヤ正典（ヘブライ語聖書）「後の預言者」の第三に置かれた預言文書で、「イザヤ書」および「エレミヤ書」と共に三大預言書に数えられる。
・預言者エゼキエルは、南王国末期、第一次バビロン捕囚（前 598 年ごろ）で連行されたヨヤキン王に従ってバビロンに移住した祭司の家系で、バビロン移住後に祭司としての任職を受け、おそらくヨヤキン元王の側近預言者の一人として活動した預言者。南王国では、アッシリア帝国末期にバビロニア・メディア連合に迎合したヨシヤ王がアッシリアの同盟国エジプトとの戦闘で戦死して以降、王家・宮廷が親バビロニア派と親エジプト派に割れた。ヨヤキン王が王位を継いだのは、エジプトの傀儡として立てられていた父ヨヤキム王が一度はバビロンに服従しながら、（おそらくエジプトとの関係から）再び反逆したために、バビロン王ネブカドネツァルの怒りを買い、エルサレム包囲戦の末に死んだ後のことである。ところが、三か月でバビロン王によって退位させられ、バビロンに捕囚として連行された（王下 24 章）。「列王記」は明言しないが、父ヨヤキム王は、自ら死んで王位を子に継承することを条件に、ネブカドネツァル王の温情を受け、王国を存続させる道を選んだと考えられる。しかし、それによって即位したヨヤキン王は直ちに退位させられ、バビロン王は、かつてバビロンとの同盟を選んだヨシヤ王の直系ヨアハズ王の弟マタンヤをゼデキヤ王として即位させた。こうして、ヨヤキン王は、ゼデキヤ王に対する人質としてバビロンに捕囚連行されたのであるが、これは、かつてヨシヤ王がバビロニア帝国勃興期に同盟参加したゆえの南王国王家に対する温情でもあったのだろう。実際、「列王記」は、捕囚連行されたヨヤキン王がネブカドネツァル王没後の次王エビル・メロダク（＝アメル・マルドゥク？）によって名誉回復されたと伝えている（王下 25:27 以下）。このようにして、バビロン捕囚期を通じてダビデ王家はバビロンの地で存続し、同時に、王家に仕える貴族・役人・祭司の集団も維持された。エゼキエルは、そのような状況の中で、南王国滅亡に至った経緯を批判的に検証すると共に、かなり確度の高い希望として王国再建・エルサレム再建を預言として告げているのである。
・日課箇所は、33 章以下で展開している「イスラエルの民とエルサレム（神殿）の回復の預言」の中で告げられる「牧者のたとえ」の一部。ユダ・イスラエルの歴代の王は、「神の羊の群れ」を託された「牧者（羊飼い）」にたとえられている。ここで「牧者である彼ら」（1 節）と指差されているのは、バビロンに捕囚されていたダビデ王家の者たちであろう。この王家は、少なくとも王国末期には外交の失敗と権力闘争によって王国を混乱させ、民を離散させる結果をもたらしたという直近の歴史的事実があった。預言者は、そのような歴史を踏まえて、王家の者たちに、正しい「牧者」としての再起を促すためにも、ここから始まる一連の預言を告げたのであろう。この章の預言は、既存の「牧者」が排除された後、神ご自身が「牧者」として導かれると告げるが、それで終わらず、新しいダビデのような「一人の牧者を起こ」（34:23）すとも続いており、「王家の新生」を示唆している。

使徒書日課（使徒言行録 8 章より）

・「使徒言行録」の全般的特徴については、前回までの資料を参照。
・日課箇所は、初期の使徒たちによるエルサレムの教会共同体において「ギリシア語を話すユダヤ人」と「ヘブライ語を話すユダヤ人」との間で生じた衝突を解消するために任命されたとされる七人の「奉仕者（ディアコノス）」の一人、フィリポが「福音宣教者」として伝道活動に従事していた中で起こったとされる逸話物語。「使徒言行録」が最初に描く「異邦人の洗礼」事例。
・ここに登場する「エチオピアの女王カンダケの高官」については、歴史上、何も知られていない。現今の「エチオピア」の由来する国家は、歴史上、紀元 100 年ごろに建国されたとされる「アクスム王国」から知られるのみだが、伝承によると、この王国王家は前 10 世紀のイスラエル王ソロモンとシェバ女王を始祖とするシェバ人によって形成されたとされている。シェバ人は、紅海を挟んでアラビア半島とアフリカ東部を拠点としていたセム系の交易民。このような建国伝承を持つ「エチオピア」は、4 世紀以降近代に至るまで「キリスト教徒（コプト教徒）」と「ユダヤ教徒（ベタ・イスラエル）」が主流を占めてきた。「使徒言行録」の逸話が、このような王国の歴史を踏まえたものであったかどうかは定かでない。歴史的には、1 世紀当時、ヨルダン川の東岸を中心にアラビア半島で広範に支配権を確立していたセム系の「ナバテア王国」がシェバの女王に由来するシェバ人の末裔国と言い伝えられており、長年ユダヤ教との接点を持ってきたのみならず、4 世紀のローマ帝国によるキリスト教公認以前に、この王国で広くキリスト教が定着していたと推認される証拠がある。このように、エチオピアの「アクスム王国」と「ナバテア王国」は兄弟国的な関係にあったと考えられ、「使徒言行録」は、実際には「ナバテア王国」を想定してこの逸話の登場人物を描いているのかもしれない。

・この逸話中でフィリピが宦官のために説き明かした「イザヤの書」の引用箇所は、イザヤ書 53 章の「主の苦難の僕」の章句で、初期の使徒たちの教会が「イエス」を「メシア」として理解するうえで典拠にしたと考えられる箇所である。「ペトロの手紙一」は、イエスを「苦難を受けられた方」として強調しており、「使徒ペトロ」を中心とした主流派が、「苦難のキリスト（メシア）」という、当時のユダヤ教界隈では斬新な「メシア像」を打ち出していたと考えられる。

福音書日課（ルカ 15 章より）

・日課箇所は、14 章から始まる安息日のファリサイ派議員の家での食事の席を場面として設定された一連の箇所（14:1~17:10）の一部で、罪人とみなされる者とも一緒に食事をすることを批判する者たちへの反論として主イエスが語られた三つのたとえのうちの二つ、「見失った羊のたとえ」と「無くした銀貨のたとえ」が含まれる。もう一つのたとえは「放蕩息子のたとえ」。

・三つのたとえのうち最初の「見失った羊のたとえ」は、「マタイ」に並行箇所が知られる（マタイ 18:12~14）。「マタイ」は、これを「教会共同体」が「小さな者」を決して蔑ろにしてはいけないという文脈に置いており、信徒らの行動規範を教えるたとえとして位置づけ、焦点は共同体の内的秩序にある。他方、「ルカ」は、これを「徴税人や罪人」と食事の交わりを回復させることが神の御心であるという趣旨で位置づけており、焦点は共同体の枠組みのあり方そのものにある。「ルカ福音書」および「使徒言行録」は、基本的に、「教会共同体」の枠組みをどこまでも拡大して「開かれた一致」を求めることが神の御心であるという神学に立っている。

・4 節「野原（エレーモス）」は「荒れ野／人里離れた所」と訳される語で、もっぱら祈りや断食の場、つまり宗教的営みの場として象徴的に用いられている。

・6 節および 9 節の「友達（フィロス、仲間）」という用語は、「ルカ文書」が特に好んで用いている（新約 29 例中、ルカ 15 例、使徒 3 例、次いでヨハネ 5 例）。「ルカ」は、読者に対して「友達/仲間」をつくることを推奨しており（16:9 など）、どのような人物であれ「仲がよく（フィロス）」（23:12）なることを肯定的に描いている。

来週の誕生日 （6 月 25 日～7 月 1 日日）

。

主日礼拝の讃美歌から

・21-120 番「主はわがかいぬし」（＝Ⅱ41）は、詩編 23 編のスコットランド詩編歌で、ウィリアム・ウィッテンガムの原歌詞をピューリタンの讃美歌作家フランシス・ローズが補筆。曲は、19 世紀の詩編歌集で公にされ、1947 年の英女王結婚式で歌われ広まった。

・21-200 番「小さいひつじが」（＝こ55 番）は、19 世紀英国で金物商を営みながら讃美歌創作を続けたアルバート・ミッドレーンの作詞。曲は、ロンドンで活動したイタリア人作曲家サルヴァトーレ・フェレッティの原曲から。

・21-459 番「飼い主わが主よ」（＝Ⅰ354「牧主わが主よ」）は、19 世紀前半に英国教会司祭の娘で讃美歌作家として活躍したドロシー・スラップの作詞とされるが、詳細は不明。曲は、19 世紀米国の音楽家で多くの教会音楽も作曲しているブラッドベリーの作。

21-120「主はわがかいぬし」

The Lord's my shepherd, I'll not want

1. The Lord's my Shepherd, I'll not want; / He makes me down to lie / In pastures green; He leadeth me / The quiet waters by.
2. My soul He doth restore again, / And me to walk doth make / Within the paths of righteousness, / E'en for His own name's sake.
3. Yea, though I walk in death's dark vale, / Yet will I fear no ill; / For Thou art with me, and Thy rod / And staff me comfort still.
4. My table Thou hast furnished / In presence of my foes; / My head Thou dost with oil anoint, / And my cup overflows.
5. Goodness and mercy all my life / Shall surely follow me, / And in God's house forevermore / My dwelling-place shall be.

21-200「小さいひつじが」

A Little Lamb Went Straying

1. A little lamb went straying / Among the hills one day, / And left its faithful shepherd / Because it loved to stray; / And while the sun shone brightly, / It knew no thought of fear, / For flowers around were blooming / And fragrant was the air.
2. But night came over quickly, / The hollow breezes blew - / The sun soon ceased its shining, / All dark and dismal grew; / The little lamb stood bleating, / As well indeed it might, / So far from home and shepherd, / And on so dark a night.
3. But ah! the faithful shepherd, / Soon missed the little thing, / And onward went to seek it, / Safe home again to bring: / He sought on hill, in valley, / And called it by its name - / He sought, nor ceased his seeking, / Until he found his lamb.
4. His strong arms gently lifted / The lamb against his breast, / And as he bore it homeward / He fondly it caressed; / The little lamb was happy / To find itself secure; / And happy, too, the shepherd, / Because his lamb he bore.
5. And won't you love the Shepherd, / So gentle and so kind, / Who came in brightest glory / His lambs on earth to find! / To make them, oh, so happy, / Rejoicing in His love, / Till every lamb be gathered / Safe in His home above.

21-459「飼い主わが主よ」

Savior, Like A Shepherd Lead Me

1. Savior, like a shepherd lead us, / much we need thy tender care; / in thy pleasant pastures feed us, / for our use thy folds prepare. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / Thou hast bought us, thine we are. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / Thou hast bought us, thine we are.
2. We are thine, thou dost befriend us, / be the guardian of our way; / keep thy flock, from sin defend us, / seek us when we go astray. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / Hear, O hear us when we pray. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / Hear, O hear us when we pray.
3. Thou hast promised to receive us, / poor and sinful though we be; / thou hast mercy to relieve us, / grace to cleanse and power to free. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / We will early turn to thee. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / We will early turn to thee.
4. Early let us seek thy favor, / early let us do thy will; / blessed Lord and only Savior, / with thy love our bosoms fill. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / Thou hast loved us, love us still. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / Thou hast loved us, love us still.